
僕の彼女がソースを付けたまま弁当を温める話

麻技淮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女がソースを付けたまま弁当を温める話

【Nコード】

N9986I

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

同作者の作品、スキマクラブ「定期的な彼女」の番外編です。タイトルの通りの内容です。

僕の名前は、かみなみちようじゅ・うえもん神並長寿右衛門。

右衛門という名前の青年が主人公だからといって、別にこの話は侍の話ではない。

僕の母が日本人で一番長寿（112歳）のお爺さん次郎右衛門にあやかれるようにとつけてくれた、有り難い名前だ。

神並に長寿なんてとんでもない姓なんだから、別に普通の名前でも、かなり長生き出来るんじゃないかと思ったりもするけれど。

前回のお話（スキマクラブ「定期的な彼女」・コミックス第一巻参照）季節は流れて、僕達の住む町にも冬が来ていた。

短く切り揃えられた髪に、すつと通った鼻やパツチリとした瞳。背は174センチ。

体重550トン、まあ、それは冗談ではあるが。

そんな僕は、自分の家の中にいた。

冬休みだった。

何が何でも、冬休みだった。

そう、冬休みだったのだ――

しかし、外があまりに寒いため、外出する気にもなれなかったのだ。今日は、近所のスーパーでは特売がやっている。

行かないけど。

ちよつと街中まで行けば、服などが年末の特売で安く手に入る。

別にいいけど。

新作ゲームの発売日だ。

特に外出してまっ欲しくないけど。

外の気温は2度。

寒い、今外に出たら死ねる。

故に我は不動なり。

「あーあ、なんか暇だなあ」

学校のジャージを着た僕は、コタツの中で亀のように入っている。
「そうね、右衛門。体の軸まで寒いわ。骨髓の液体は多分、凍っているわね」

僕の背後でコタツにあたり本を読んでいる少女、てんびんはかり天秤計利は眉一つ動かさずに素っ気ない言葉を返す。

カチューシャで後ろに流された長いストレート髪、すらつとした長身と、その真つすぐな瞳は少し大人びた印象を周囲に与える。

因みに学校に生徒会の会議があり、その後であるため冬休みだというのにセーラー服を着ていた。

彼女は僕の数少ない友達で、恋人だ。高校のクラスでは委員長をしており、風紀委員の他に、生徒会役員も兼任している。

最近では、コンビニのバイトも始めたらしい。
本当によく倒れないな、と思う。

「いや、骨髓凍んないから」

一応ツツコミを入れて、僕はコタツのカバーに体を入れる。

彼女は最近よく冗談を言うようになった、そして、よく笑うようになった。紫陽花のような、控えめな笑顔が、僕はとても好きだ。

のろけている場合ではなかった。
寒い。

「コーヒーでも飲む？」

彼女が、僕の後頭部に話かける。

「それはあれか？『飲みたいから持って来て』って意思表示か？」

「そうね、そう受け取ってくれると、とても嬉しいわ」

彼女は最近よく、こういう言い回しをするようになった。

面倒くさいのであろう、コタツから出るのが。

わからなくもない、だがそれは、僕だって同じなわけで。

まあ、用意しますけど。

「あーはいはい、分かりましたお嬢様」

言っておくけど、僕は尻にしかれているわけではない。

これは、僕の愛情表現だ。

こつ恥ずかしい台詞とか、気の効いたことが出来ないから、僕はこうして彼女にサービスするのだ。

「ふふっ、ありがとう。愛してるわよ」

台所へと移動し、ちょうどポットからお湯を出していた僕に、彼女は言う。

愛している。

この言葉は、僕をコタツから出して、コーヒーを作らせているからねぎらいで言っている、と普通の人なら思うだろうが。

彼女は素で言っているのだ。

彼女は素直に感謝し、素直に自分の言葉を言うのだ。

ただ、それだけだった。

ただ、問題は…

「ぶっ！ なっ！ 何をつ！」

ポットを動かしている時に言うな！

手元が狂いそうになるのを、必死にこらえた。

最近いきなりこういう事を言うようになったので、嬉しいことこの上ないし、恋人冥利に尽きるのだが、自転車の二人乗りとか、包丁で調理している時とか、どうも手元が狂うと危険な時に言われてしまうのだ。

まあ、僕からもつとえば、それでよいのだろうか。

「あら？ 嬉しくなかったかしら？」

そんなわけがない。

それを分かっている上で、彼女はコタツから1ミリも動かずクスクスと笑っていた。

「ったく、調子いいんだから本当に…」

台所から戻った僕は、彼女に湯気の湧き立つマグカップを手渡し、自分のマグカップを片手にコタツにあたった。

今度は彼女と対面するような形で、僕はコーヒーをすすった。

「そつえば、ちょっと聞いてくれないかしら？」

コーヒーをすすりながら、彼女は言う。

語気が少し不機嫌そうなので、僕は少し不安になった。

彼女は先も言った通り、ハードスケジュールの中で生きている。

そして彼女は、「定期的な彼女」であり、あらゆるルールを順守して生きている。

だから、普通の人間以上のストレスを感じているだらうし、その気持の解放される数少ない場所が、僕であるのだ。

僕はそれが普通だと思っている、彼女の拠り所になっているという事実が嬉しいのだ。

彼女の力になれているというのが、幸せなのだ。

だから僕は、彼女の話なら徹夜でも聞ける。

実際、秋頃に一度そういったシチュエーションはあった。

「え、何かあったのか？」

今回はそんな重大な事態ではないにせよ、彼女の胸中に重みを残しておくと、後で大変なのだ。

重みが残り、彼女の中に小さなストレスが蓄積していくと、彼女は時折、小さな、小さなルール無視をする。

前回のお話（スキマクラブ「定期的な彼女」・コミックス第一巻参照）なんかがその最たる例なのだ、あの時は初めての事だったので、僕は本当に同様してしまったが。

「私、この間バイトした時の話よ、オチはないわ」

そうか、オチがないのか、なら安心して聞けるな。

「ああ、あそこのコンビニ、結構色々な客層が入るからなあ。けっこう、大変なんじゃないか？」

とりあえず僕は、彼女にストレスの有無を確認する。

彼女は、僕達が通う学校に近い場所のコンビニで働いているため、色々と苦労が多いのであろう。

僕といえば、近所の玩具店で店番をして、ちょびつとだけ稼いでいるだけなのであるが。

「そんなことはないわ、平和そのものよ」
それを聞いて、僕は安心した。

そうか、それならいいんだ。

「それでね、この前お弁当温める時にソース付けたままにしちゃったのよ。そしたら大爆発。それが最後のソースカツ弁当だったから収拾がつかなかったわ」

「え、超凡ミスじゃないっすか計利さん。」

僕は啞然とした。

完璧に見える彼女も、そんな事があるのか。

彼女には失礼かもしれないが、定規と呼ばれてしまう彼女も、やっぱり人間なんだなあ、と思い、安心した。

僕は一時期、彼女が完璧すぎるため、天秤計利は完璧超人の一体かと思っパーフェクトちょうじんていたくらいだ。

しかし、今回の件で僕は確信した、彼女も一人のただの少女であることを。

なら僕は、もっとやさしくしなければ、と思った。

ミスもする、怒りも、憤りも、泣きもする彼女を、しっかり守らなければ、と思うのであった。

「そうなのよ。それだけ。」

今度は彼女がコタツに潜り亀のようになったため、僕は座ったままこたつにあたっている。

これで、この話は終了である。

この後は、特に変わった事が起こらなかった。

18 禁的なアダルト展開とか、接吻とか、いきなり不思議動物に導かれて異世界に迷い込むとか、超人レスリングに参加したりとか、そういった諸々がないため、この話はここで終了である。

オチは特に無い、彼女の宣言通りに。

おわり

（後書き）

因みにスキマクラブはコミック化されていません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9986i/>

僕の彼女がソースを付けたまま弁当を温める話

2010年10月21日21時18分発行